



Title	快適な職場をめざして
Author(s)	野末, 泰夫
Citation	大阪大学低温センターだより. 2017, 167, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

快適な職場をめざして

理学研究科 野末 泰夫

E-mail: nozue@phys.sci.osaka-u.ac.jp

平成21年4月から4年間、低温センターのセンター長・副センター長を拝命し、豊中分室を中心に担当させていただいた。その後、平成27年10月から、再びその役目を拝命している。低温センターは小さな部局ではあるが、寒剤を利用する多くの研究室の研究教育を支援する「縁の下の力持ち」として非常に重要で不可欠な存在である。低温センターでは、センターに所属の教員と非常勤技術補佐員に加えて、その重要な役割を支えるために、寒剤を利用する研究科から技術職員を派遣していただき運営されている。低温センターにはヘリウム液化のための大型の設備があり、その運転と寒剤供給に加えて、設備の維持管理や更新に関連する数多くの用務がある。それらの用務を、低温センターに派遣され経験を積んだ技術職員と共に、一丸となって遂行しており、その意味からも、低温センターが職場としてより快適であって欲しいと願う次第である。

近年、ワークライフバランスの実現や女性の活躍の促進や働き方改革などが言われている。教員にあっては、研究や教育に加えて、様々な管理運営に従事するが、その多くは自らの判断が求められる。研究費を外部から取ってきて、自ら研究を発展させる立場にあり、異動しても、その成果は研究者個人の業績として一生ついて回り、競争的な評価を受ける。教員には裁量労働制が適用されており、自らの判断で業務に従事することが少なくない。また、管理運営については、短期的にも長期的にも大きな責任を負うことが多い。

一方、技術職員の方達は、教員とは立場が異なり、大学として必要とされる業務に従事し、また、勤務時間が管理されている。超過勤務は、いわゆる36協定の範囲内で、必要に応じて従事する。そのような中で、低温センターに派遣されている技術職員の方達は、日々、センターの業務に従事しながら、将来に向かって経験を積み、また、学内外の様々な研修や会議にも参加している。それらが円滑に進むためには、低温センターが職場として孤立せず、ひとりひとりの技術職員が、その素養や経験を生かしながら、様々な研鑽を積んで行く中で、互いに協力しながら、役割を担って行くことが期待される。低温センターでの業務は、高圧ガス保安法の管理下で行われるだけでなく、回収されたヘリウムガスの精製や備蓄や液体ヘリウムの製造と供給を含めたシステム全体の運用が含まれており、その中には様々なノウハウが蓄積されている。また、低温センターの利用者の期待に応えるため、互いの交流も深めて行かなくてはならない。また、様々なトラブルへの対応も行われている。そのためにも、職場が安全であるだけでなく、快適で柔軟性に富み、お互いに理解し協力し合える雰囲気満たされていることが重要である。一方で、派遣元の所属部局における役割も重要であり、低温センターの業務を中心に進めながらも、閉塞感のない開かれた職場としてのバランスが必要であり、所属部局や学内外の人たちとの交流をもちながら、様々な役割を担って行くことが望まれる。その際、管理が支配することにならないように注意が必要であるが、責任の所在を明確にしつつ、できるだけ対等な関係を築いて行きたいものである。低温センターが快適な職場であることを願ってやまない。